

っています。これも紙面の関係で次回に続きます。

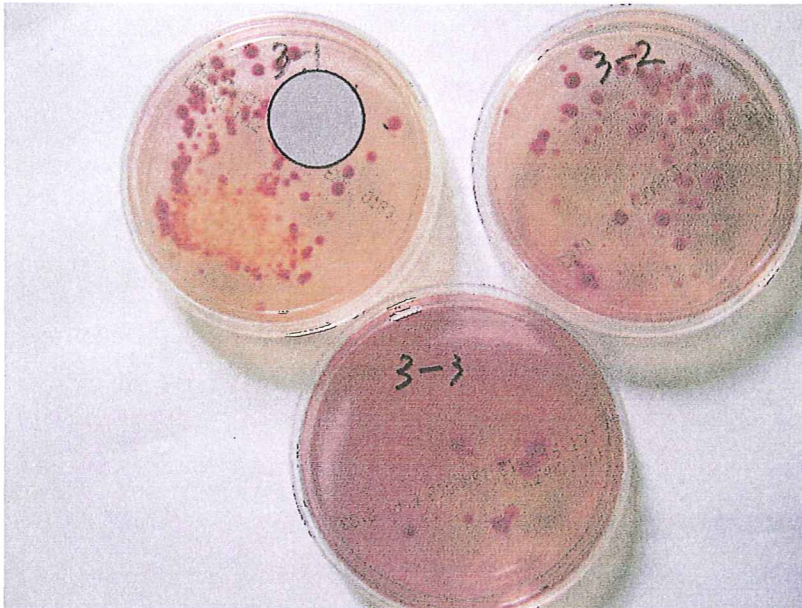


写真 3

2. ボランティアウェイティングペリオド (VWP 自主的待機期間) を考える

先月例にあげた農場では、DIM40-50 日台での受胎率 36.5%と全体の受胎率 36.2%に大きな差がなく、少なくとも現状の授精開始日を遅らせる必要がないと判断されました。次に別の農場の例を見てみます。

B 農場

搾乳日数	種付すべき 頭数	実際の 種付頭数	発情 発見率	妊娠すべき 頭数	実際の 妊娠頭数	妊娠 率	その後の 流産頭数
DIM	Br Elig	Bred	Pct	Pg Elig	Preg	Pct	Aborts
50	202	48	24	202	12	6	2
71	188	67	36	188	18	10	2
92	166	93	56	166	46	28	3
113	121	69	57	119	27	23	2
134	86	50	58	84	25	30	1

図 1-1

この農場の DIM50 での受胎率は、 $12/48=25\%$ で、妊娠率はわずかに 6%でした (図 1-1)。この農場の多くの牛がこの時期、まだ受胎の準備が十分整っていない

いことが伺えます。そこでこの農場の VWP を 70 日 (DIM70-89) にして、見てみると受胎率で $38/89=43\%$ 、妊娠率も 21% に上昇していることがわかります (図 1-2)。VWP1.5 周期の延長によって初回受胎率が 18% 上昇しています。

DIM	Br Elig	Bred	Pct	Pg Elig	Preg	Pct	Aborts
80	177	89	50	177	38	21	2
101	137	68	50	136	27	20	1
122	108	67	62	106	32	30	2
143	71	37	52	69	15	22	1

図 1-2

図 3 は、Jose E.P.Santos(フロリダ大学)が示した図です。VWP が 1 性周期遅れれば、その初回 AI 受胎率は 8-10% 増加していなければならないとし、例として、もし VWP60 日の初回 AI 受胎率が 30% であれば(発情発見率は 100% として)、VWP80 日での初回受胎率は 42%、VWP100 日では 50% なければ、同等の繁殖パフォーマンスを得ることはできないとしています。このように、理論的・実際的にも VWP の短縮は意味のあることで、その延長は、繁殖パフォーマンスに大きな影響のあることがわかります。

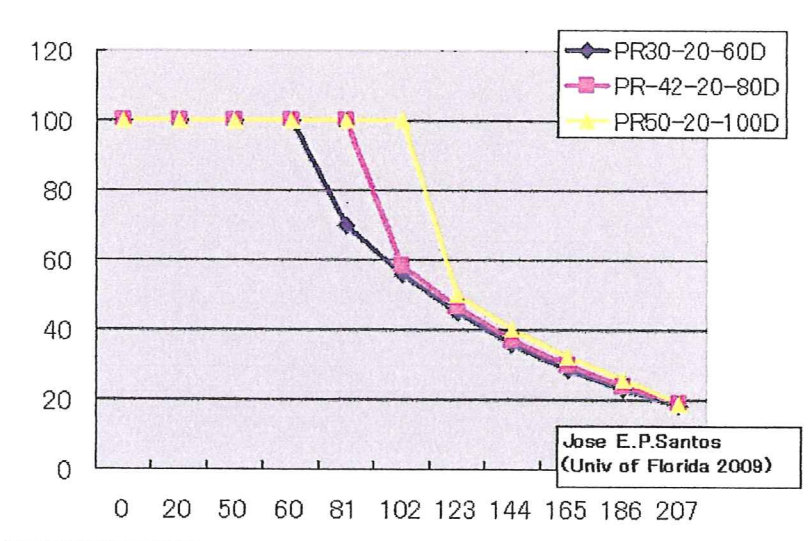


図 3

B農場の場合には、早期での低受胎率改善(原因究明)を図りながら、現状のVWPを10-21日ほど遅らせるほうが経済的であるかもしれません。また、この場合、上記Jose E.P.Santosが述べている1性周期遅らせるときにその受胎率が8-10%上昇しなければならないという示唆に準じているのは、興味深いものです。

つづく

黒崎